明治初年に大坂城址に設置された近代的諸施設について

ON THE MODERN FACILITIES ESTABLISHED IN THE OLD SITE OF THE OSAKA CASTLE IN THE EARLY YEARS OF MEIJI

橋 寺 知 子*, 川道 麟太郎**

Tomoko HASHITERA and Rintaro KAWAMICHI

The Osaka Castle was burnt down at 1868, and the owner of the site was transferred to the Meiji new government from the Tokugawa feudal government. In the early years of Meiji, the state of the old site of the castle changed drastically. In that site, some modern buildings with the Western style were constructed and some new facilities were established by using old Japanese buildings. Their buildings and facilities were military, educational, and medical ones. Military use and civil use had coexisted side by side in the site at the beginning years of Meiji.

Keywords : *the Osaka Castle, old site of the castle, early Meiji, land use, modernization*
大阪城、城址、明治初年、土地利用、近代化

はじめに

大坂城は慶応4年(1868年)の1月に焼け落ち、大坂城址となって新政府軍の手に落ちた。同月に征討大將軍仁和寺宮嘉彰親王が薩摩・長州軍を従えて大阪入りをし、大久保利通が「大阪遷都論」を建議し、さらに3月には明治天皇が大阪に行幸し滞在した。また、兵部大輔になった大村益次郎は、大阪に陸軍の拠点を開こうと考えていた。これらのため、大阪はにわかに新国家建設のために注目される土地になる。このような中で、明治初年に、大坂城址に舎密局、兵学寮、軍事病院など、日本の近代化を図る施設を設置することが決められ、建設に移されていった。これらの施設については、それぞれ当時の先端的な施設でもあり、個別には研究もかなりある。しかし、それらが同時期に、大坂城址という同一の地域に設置されたものとして一体的に取り扱った研究はない。また、それらは竣成したものの、激動する維新期の混乱の中で、短期間にその内容や管轄を激しく変えていったため、それらの系統的で正確な把握は容易ではなく、既往の文献でもいくぶんの混乱が見られる。そこで、本研究では、明治初年に大坂城址に設置された諸施設を包括的に取り上げ、個別の諸施設に関する先行研究の成果を踏まえ、それに新たな知見も加えて、それらの設置と変遷の状況を系統的に明らかにしておきたい。

1. 本論における「大坂城址」の規定

大坂城は、天正11(1583)年に豊臣秀吉によって建設が開始され、三の丸、総構をもつ大きな城郭であった。秀吉の没後、大阪冬の陣・夏の陣を経て城は荒廃したが、その後徳川將軍家の城として豊臣期以上に壮麗な城に造り変えられた。江戸期の大阪は幕府の直轄地であり、「天下の台所」と称されたように、日本の経済・流通の中心として栄えた。現在一般に大阪城として認識されている堀に囲まれた部分は、徳川期に完成した本丸と二の丸の部分である。豊臣期の三の丸は、冬の陣により堀を失い一時荒廃したが、新たに市街地として整備され、將軍に代わって城を預かる城代・定番・加番などの役人たちの屋敷や奉行所などの役所が集まっていた。城郭を中心として、関連する行政機関が周囲を取り囲み、城と一体となって機能していたのである。図1は、幕末・文久年間の1863年頃の大坂城付近の地図である。西側の上町や船場のように町人が居住する地域と、「東町御奉行所」や「御城代屋敷」、「下屋敷」などの文字が読みとれる旧三の丸地域とでは、街区の大きさや形状が異なり、街の性格が違ふことが見てとれる。徳川政権が崩壊すると、堀で区画された本丸・二の丸だけでなく、その周囲の役人たちの屋敷や役所もその機能を失った。明治新政府はそれらの跡地を一体として利用し、新たに各種の施設を設置していったのである。

このような観点から、本研究では、「大坂城址」を、徳川期の本丸と二の丸に豊臣期の三の丸を加えた区域として規定する¹⁾。地図上で示すと図1および図2の一点鎖線で囲んだ区域であり、現在の

* 関西大学工学部建築学科 専任講師・博士(工学)
** 関西大学工学部建築学科 教授・工博

Lecturer, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kansai University, Dr. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kansai University, Dr. Eng.

図1 幕末の大坂城周辺

地名等を使って記述すると、西の境界は谷町筋（筋東側沿道の民家用地の部分は除く）、北は大川と平野川、東はJR環状線（旧猫間川）、南は龍造寺町・上町・法円坂1丁目のそれぞれの境界で囲まれた区域となる。

2. 教育施設の設置

近代化に向けて、計画が早くから具体化したのは教育施設であった²⁾。西洋の科学技術の導入はすでに幕末から始められ、西洋の学術を教授する学校の設置が江戸幕府や先進的な諸藩によって進められていた。維新後もそれらの事業の多くが明治新政府によって引き継がれたが、理化学の研究教育機関もその一つであった。元治元（1864）年、長崎の医学校・養生所内に理化学学校・分析研究所が設けられたが、幕末の混乱から計画は中断し、結局、明治新政府によって慶応4年7月に理化学学校は大阪に移すことが決められた。日本教育史の倉沢剛は、この頃までに洋式の近代貨幣工場を大阪に建設することが決まっており、それにあわせて「造幣技術に必要な物理・科学の研究講習が急務であった。そのためまず第一に、化学所すなわち舎密局を考え」³⁾たと述べている。舎密局の建設場所は、城の西側の京橋口御定番屋敷跡に決まり、10月に起工、翌明治2年3月末には校舎が竣工し、同年5月に開校した。舎密局については、近代建築史の菊池重郎、化学者で科学史家の芝哲夫、京都大学大学史を調べている藤田英夫らによって、その施設や教育内容についてかなり詳しく報告されている¹⁾。とりわけ舎密局の建設場所は、菊池重郎の研究によって確定されたとと言える⁵⁾。これらの研究によると、その校舎は写真1にあるように、周囲にベランダをめぐらせた洋風の建物で、中央部に風見のついた櫓を高く掲げていた。平面はコの字形で、教室が階段状になっているなど、木造ではあったが先進的な建物であった⁶⁾。西隣には舎密局の教頭・ハラタマの居宅も新築され、それも写真3のように、ベランダをめぐらせた洋風の建物であった⁷⁾。舎密局は早くも明治3年5月には、大阪理学校に名称が変わっている。

舎密局の設置が大阪に決まった明治元年暮頃には、城址西部地区に舎密局を含み他に多くの施設を配した「新大学校」の構想が描かれていた⁸⁾。大阪府は明治元年の10月付けの「御布告案」で、「此度追手前に於て新大学校御取建二相成、舎密術を初め英学・仏学・蘭

写真1 舎密局

写真2 大阪府医学校病院

写真3 ハラタマの住居

写真4 兵学寮

写真5 砲隊営

写真6 大阪軍事病院

学・数学・法学等學術御開二相成候」と発表している⁹⁾。日本の近代の公園や博覧会計画の草分け・田中芳男が舎密局の御用掛になって、そこで描いた「新大学校」の計画図が残っている。それは、舎密局などの「学問所」のほか、「園囿」や「遊歩所」、「博物場」などを含み、西洋式の庭園も併せ持つ先進的なものであった¹⁰⁾。大阪城址に、軍事利用に対して、一方で文教施設のかかなり大きな構想が描かれていたことになる。

舎密局に続いて、西洋の諸学を教授する洋学校が、明治2年9月に淀川の北岸・天満川崎の宮繕司庁跡に、生徒寄宿所とともに、仮のものではあったが設置された¹¹⁾。高度な理化学を教授する舎密局に対して、こちらは語学や数学等の普通学を授ける学校で、当初は大阪府の管轄であった¹²⁾。同年12月、この洋学校は大阪府の管轄から民部省の管轄に移り、神戸にあった兵庫県洋学校も吸収して、校舎を城西の島町旧代官邸に移した。明治3年7月には、東隣にあった旧裁判所兵部出張所が転出した機会に、その跡を洋学校の教室に充てたいと管轄者の大学に陳情し、合わせて講堂の建設も願い出ている¹³⁾。このことから、洋学校を設置した時点では古い建物を転用し、それだけでは手狭でもあり不十分であったことが伺える。

同年10月に、洋学校は大阪開成所と名称が変わり、同時に大阪理学校すなわち旧舎密局は大阪開成所分局理学所となって、それら2校が統合した。この統合を契機として、旧洋学校の狭隘な校舎を改め、「理学校内の空地へ新校舎を建て増し、両校合併して講学を便に」¹⁴⁾することが計画された。大阪開成所の新校舎は明治4年6月に旧舎密局の建物の南側に完成して、7月に新たに開校し、島町の旧洋学校校舎は寄宿舎に充てられた。

このように、校舎は次第に整備され、施設の体裁も整えられていったが、大阪開成所の名称は落ち着かず、第四大学区第一中学校、開明学校、大阪外国語学校、大阪専門学校、大阪中学校など、何度も改称される。さらに、明治19年には第三高等中学校に改称され、22年にはついに京都へ移転し、国の管轄する高等教育機関は大坂城址からはなくなった。

3. 医療施設の設置

西洋医学の受容史を研究している松田武は、「大阪府仮病院の創設」¹⁵⁾において、明治初年の大阪における近代西洋病院の設置の

経緯を論じている。本章では、主にそれを参考にして、大坂城址における医療施設の設置の様子を見ていく。

慶応4年閏4月、大阪裁判所は「今度浪花ニ於て病院御取建二相成、窮民ニシテ疾病療養不行届之もの共御救助可被為在旨被仰出候事」と、明治天皇の御沙汰が下ったことを発表している¹⁶⁾。これを受けて同年（明治元年）12月に大阪府仮病院が開設され、オランダ人軍医・ボードインがその長に任命された。しかし、ボードインの着任は遅れ、最初の2か月ほどは、舎密局の教頭に就任することが決まり既に在阪していたハラタマが、彼に代わってその任務にあたった。ハラタマはボードインが長崎にいたころ理化学教育の充実のためにオランダから呼び寄せた人物であるが、軍医学校の出身で軍医の経験もあった¹⁷⁾。この仮病院については、「日記（仮病院詰所附）」¹⁸⁾によって、明治元年12月14日の開設から明治2年2月25日の間の様子を知ることができるが、そこに病院の所在がわかる記述はない。所在地については、後に正式の大阪府病院が設置された旧鈴木町代官屋敷とするものや尼崎町の種痘所に置かれたと推定するものがある¹⁹⁾。御沙汰書の発布から設置までの期間の短さや「仮」とついた名称から考えて、建物は既存のものを転用したと考えられる。松田は、日記の記述内容から、仮病院は「太政官の意向に沿って大阪府が設立の任にあたり、大阪府兵局の直接管轄する軍事病院であった」²⁰⁾としている。すなわちこの病院は、設置の契機となった病院取建の御沙汰書にあるような市民のための一般病院ではなく、少なくともその始まりの数ヶ月は、軍事的色彩の濃い、限られた者を対象とする病院であったと言える。しかし、明治2年7月19日には「今般鈴木町元代官屋敷ニ於て而病院取建相成候二付、診察・療養請度ものハ、朝四ツ時より九ツ時迄之間、勝手ニ罷越可申候、尤困窮のものとも者、同書へ願次第、施薬をも遣し候」²¹⁾との布令が出されており、この頃には市民も利用できる施設になっていたことが分かる。

明治2年2月にボードインが着任して、大阪府仮病院は大坂城址外の上本町の大本寺に一時期移転した²²⁾。ここでは寺の庫裏を利用して治療と医学伝習が行われたが、同年7月には大坂城址内の鈴木町の代官屋敷跡に移り、正式に大阪府病院が発足した。しかし、『近代年来記』の明治2年10月頃の記録の中に、「鈴（木）町代官も異国の医師宿に相成、いたわしき事成」²³⁾とあるように、建物はまだ旧幕時代の建物を転用して使っていたと考えられる。同年11月には西側隣地によりやく建物が新築され、名称もこのとき大阪府医学校病院と変わった。その建物群は写真2に見るもので、菊池重郎によってその施設の先進性や意義について既に報告がある²⁴⁾。第三高等学校の学校史『史料神陵史』でも、「医学校舎は、教場并に解剖場等は先年蘭医ボードインの差図に依って新築したもので可成壮麗であったといはれる」²⁵⁾とある。

医学校病院は、開校の翌年、大学の管轄となり、明治5年8月には第四大学区医学校と改称されたが、まもなく同年9月に学制改革によって廃校となった。旧医学校の建物は、いったん第一番中学校に引き継がれ、その後は明治6年8月に設置された大阪師範学校の校舎として使われた²⁶⁾。

4. 軍事施設の設置

兵部大輔・大村益次郎は、陸軍の主要な機関を首都東京ではなく

大阪に集中させることを企図した。大村はその計画を進めるために来阪の途上、明治2年9月に京都で襲われ命を落としたが、その遺志は引き継がれ、兵部省大阪出張所役庁、兵学寮、造兵司、軍事病院などの施設が二の丸・本丸を中心に設置されていった²⁷⁾。

兵部省（後の陸軍省・海軍省）は、明治2年7月に大阪出張所を設置し、その役庁には、焼け残っていた千貫櫓と多聞櫓があてられた。それらは大手口の城門に付属して今も残る櫓だが、「窓は硝石張りにして高卓椅子と改め」て使われた²⁸⁾。

兵学寮は陸軍幹部の養成機関で、後の陸軍士官学校にあたり、青年学舎とも呼ばれた。『陸軍省沿革史』によれば、明治2年9月に京橋口門内に設立された。しかし、建物は明治3年1月の段階でも完成していなかった²⁹⁾。完成した建物は、写真4のように、広い中庭をもつ口の字形の洋式の建物で、完全に西洋式の生活や軍隊の訓練が行える施設になっていた³⁰⁾。明治3年4月に、京都河東操練所を移して、下士官を養成する教導隊が兵学寮内に設置され、5月には横浜語学所が兵学寮の幼年学舎として大阪に移された³¹⁾。幼年学舎の設置場所については、「城内の櫓をもってあてられ」³²⁾たや、「御多門の横手」³³⁾とするものがあるが、いずれにしても二の丸大手口付近に設置されたと推定できる。しかし、明治4年10月には兵学寮は東京へ移転し、それにあわせて教導隊、幼年学舎も移転して、一時期、大阪に集中していた陸軍士官の養成機関は大坂城址からなくなった。

士官だけではなく多数の兵隊が日本各地から大阪に集められ、そのための駐屯所や訓練施設が主に城の南部に設けられた。明治5年5月発行の『大阪市中地区町名改正絵図』を見ると、「兵隊営」や「砲隊営」と記された区画があり、砲隊営の区画にはコの字の平面形、なまこ壁風の外観意匠で北面の中央に玄関ポーチを持つ西洋風の建物の絵が描かれている。それは写真5の建物を描いたものである。玉置豊次郎によると、明治5年5月発行の上記の地図は、それ以後に定められた新町名等が記入されていることから、実際には明治8年4月以降に発行されたものとされるが³⁴⁾、この「砲隊営」は地図に依らずとも、他の文献資料に依っても明治5年4月に竣工した砲兵第4大隊の兵営であると特定できる³⁵⁾。

造兵司とは官営の兵器工場のことである³⁶⁾。明治3年2月に設置が決まり、3月には場所が城の北東部の米倉跡に定められた。4月には青屋口門内中仕切元番所に仮庁が設けられ、5月には仮の木造工場が竣工して、6月には事務所を仮庁からその仮工場に移転している。本格的な工場施設は、明治5、6年頃から順次竣工していった。名称は、明治4年7月に大阪造兵司へ、翌5年2月には大砲製造所と変わり、広く知られる大阪砲兵工廠という名に変わったのは明治12年のことである。

大阪軍事病院は、大村益次郎の上申にもとづき、彼の死後になるが、明治3年1月に認可された。軍医学校が併設され、当初は、前章で見た大阪府病院からボードインや緒方惟準らの多くのスタッフが移り運営にあたった。発足時は京橋前之町の旧東町奉行所を使用していたとされるが、大阪府医学校病院（旧鈴木町代官屋敷）の東隣に置かれたとする説もある³⁷⁾。明治4年2月には城内玉造門内に、写真6の建物が竣工している。菊池重郎の研究によれば、分棟式配置の近代的な病院で、ボードインが大阪府医学校病院の時以上に関与したとされる³⁸⁾。

『近來年代記』に、明治4年9月22日に明治天皇の誕生日を祝って市民に城中の見物が許されたとある。そのときのこの著者の感想に、「異国作りにして其美成事云計りなし。妙々立方なり」³⁹⁾とある。具体的にどの建物を指しているのかは書かれていないが、この頃までに城中には兵学寮や大阪軍事病院が竣工しており、それらの目新しい洋風建築を見ての感想であろう⁴⁰⁾。

図2 明治4、5年頃の大坂城址の利用状況

表1 明治初年の大坂城址における諸施設設置状況

	教育施設		医療施設	軍事施設
	舎密局	洋学校		
慶応3 (1867) 以前	慶応2.11 江戸に理化学学校開設が決定 慶応3.1 ハラタで長崎より上京、東京開成所内に理化学学校が新築されるのを待つが、10月幕府瓦解、雇用契約は明治政府に引き継がれる。		大阪府仮病院 大阪府病院 大阪府医学校病院	大阪軍事病院
慶応4 明治元 (1868)	7月 大阪に理化学学校を移すことを決定 10月4日 舎密局 起工 11月18日 棟上	10月 大阪府「新大学校」の御布告案	閏4月 「病院取建の沙汰書」 12月 大阪府仮病院開院【大阪府兵局】 (鈴木町代官屋敷跡又は種痘館) ハラタマが診察	
明治2 (1869)	3月 舎密局 工事完了 5月 舎密局 開校 (京橋口御定番屋敷跡) 【大阪府】	9月 洋学校 開校 (天満川崎宮緒司所跡) 【大阪府】 12月 (島町代官所跡)に移転、 【民部省】の管轄に	1月末 ホードウィン東阪 2月 大阪府仮病院開設(上本町・大福寺) 【大阪府】 7月 大阪府病院開設(鈴木町代官屋敷跡) 11月 大阪府医学校病院開設(加州屋敷跡) 【大阪府、実質的には大学東校運営】	
明治3 (1870)	4月 【大学】の管轄に 5月 大阪理学校に改称 【造幣寮】の管轄に 閏10月 大阪開成所分局理学校 → 閏10月 大阪開成所に改称 として統合される【大学】	4月 【大学】の管轄に	2月 【大学】の管轄に	1月 大阪軍事病院 認可(京橋前之町 東町奉行所跡又は 大阪医学校病院東 隣) 【兵部省】
明治4 (1871)		7月 (旧舎密局南側)に新校舎竣工 し、移転。旧校舎は寄宿舍に。	7月 大阪府医学校付属大阪病院に改称【文部省】	2月 (玉造門内)に 新築・移転
明治5 (1872)		8月 第四大学区第一番中学校 に改称	8月 第四大学区医学校に改称 9月 学制改革、廃校となる	
明治6 (1873) 以降	M9 舎密局の建物、 大阪司薬場として利用 M14 解体	M6.4 開明学校に改称 M7.4 大阪外国語学校に改称 M7.12 大阪英語学校に改称 M12.4 大阪専門学校に改称 M19 三高に改称、M22京都へ移転	M6.8 大阪府医学校病院の建物は、 大阪師範学校として利用	

明治4年7月の廃藩置県と同時に、日本の軍制は大きく変わった。大阪に設置されていた陸軍の中樞機関は、ほとんどが首都東京へ移転して軍事面でも中央集権が進められた。全国は4つに分けられ、大阪には大阪鎮台本部が設置され、陸軍の西日本の拠点と位置づけられた。その後、大坂城址にはそれに応じた軍事施設や関連施設がさらに設置され、一段と軍事拠点としての色彩を濃くしていった。

5. 諸施設の設置と分布

明治初年の1、2年のうちに、大坂城址は大きく変貌し始めた。明治に元号が変わって1か月後には、早くも京橋口御定番屋敷跡で舎密局の工事が始まり、同年の12月には天皇の御沙汰にもとづいて大阪府仮病院の活動が古い建物を転用して始まった。明治2年には、舎密局が竣工し、兵部省の役庁が焼け残った大手口の城郭の一部に設置され、堀に囲われた二の丸の北西部では兵学寮の新設工事も始まっていた。明治3年にはその兵学寮が竣工し、旧三の丸の南西端には大阪府医学校病院の建物が新たに完成に向かっていった。明治4年には二の丸南東の玉造門内に大阪軍事病院が竣工し、造兵司の工場が青屋口の北東部に、また兵隊の駐屯所や訓練所が旧三の丸の南部にそれぞれ完成あるいは建設中であった。

図2は、明治4、5年における大坂城址の利用状況を地図上に示したものである。これを見ると、軍事の中樞的施設は堀に囲まれ防御性の高い本丸や二の丸に、兵器工場は隔離と水運の図れる北東外縁部に、多くの一般兵が寝起きする駐屯所や訓練所は、もともと武家屋敷が多く敷地の広い旧三の丸南部に、そして教育施設や医療施設は一般市街地に接する旧三の丸の西部外周部にと、それなりの配置の原則にしたがって設置されていることがわかる。舎密局の御用掛田中芳男が明治元年の暮れ頃「新大学校」の構想を描いたのは、西凡例：()内は所在地を示す。【 】内は管轄を示す。

部外周部に位置する舎密局・大阪開成所の敷地とその北側の空白の土地を用地としてであった。それらの設置計画は必ずしも総合的になされたものではないが、上記の配置原則に見るように、ばらばらになされたものでもない。軍事施設は国の機関である兵部省が、また教育と医療施設は大阪府が、それぞれ計画し設置した。しかしこの時期、国や大阪府といっても、安定し自立した機関として成立していたわけではなく、大阪府の知事や役人は新政府によって任命され、そのもとに国と府は連携し役割分担をしていたのである。何より、この頃はまだ、新政府が手中に収めた大坂城址の土地に十分な余裕があり、大まかな土地の使い分けによって、同時並行的に建設が進めていくことで特に問題が起きることはなかった。また、施設の設置主体や管轄は異なっているが、数少ない外国人指導者が対岸の造幣寮も含めてそれらの設置や運営にかかわっていた。舎密局の教頭に就くことが決まっていたハラタマは舎密局の建設や造幣寮や病院の運営にもかかわり、ボードインは大阪府医学校病院と軍事病院の建設に携わった。生徒も講義を聴講するために他の施設へ通いもしている。どの施設でも西洋技術の修得と人材の育成が急務であったのである。

6. 諸施設の変遷

表1は、明治初年に大坂城址に設置された諸施設の設置と変遷の状況を系統化して年表に示したものである。いずれの施設も短期間のうちに激しくその管轄や名称などを変えていることがわかる。教育・研究施設の端緒となった舎密局は、旧幕府の交わした契約を明治政府が引き継いで実現したものであり、明治2年5月に開校しているが、1年後の3年5月には早くも大阪理学校に改称し、管轄も大学に移り造幣寮のもとに属している。舎密局の建設に当たっては、

当初「新大学校」の構想も存在したように、舎密局と洋学校や大阪府医学校病院は、ともに大阪府のもとで運営され関連を持っていた。しかし、これらの施設も、明治3年にはいずれも府の管轄からはずれ、一括して翌年に創設された文部省の管轄のもとに移っている。もともとは国がつくるべき施設も、まずは大阪府のもとで建設し、国の体制の整備とともにその所轄を変え、それぞれの位置に収まっていったと見ることもできる。二の丸や本丸にあった兵学寮や教導隊などの軍の教育機関も、明治4年にはすべて東京に移り、兵部省出張所も地方の軍事拠点である大阪鎮台本部へと変わる。いずれも、国の先端的な施設から、国の管轄の下での地方の中心的な施設へとその役割を変えていったのである。

おわりに

明治初年に大坂城址に設置された諸施設は、激動する国内情勢と欧米列強の脅威のもとで、新政府が国の近代化のために急いで整備しようとしたものであったが、その建設が進んでいる最中にも、それらを取り巻く環境は激変していた。明治元年9月には天皇が東京に移り、翌2年には東京遷都となり、版籍奉還も進み、明治4年には廃藩置県が断行されて、いよいよ東京を中心とする中央集権的な体制へと進んでいった。この間に、大坂城址に設置されたばかりの施設もその影響を直接に受け、それらの役割・内容や管轄・名称などを変えていった。朝令暮改とも言える変更は、統治の体制が変わる変革期であったことに因るが、体制が安定していない中でも、可能ところで使える手段を使って、近代化を早急に進めていこうとした結果のあらわれであった。明治初年、大坂城址に旋風のように巻き起こった時代を先駆ける活況は、一気に沈静化していったと言える。しかし、設置された施設はその地位や性格を変えながらも、

兵学寮 青年学舎 幼年学舎 教導隊	造兵司	兵部省役庁	一般事項
(8月 兵学校、京都に設置)			慶応3.10.14 大政奉還 12.9 王政復古の太号令
9月 大阪に兵学寮(青年学舎)設置決定【兵部省】	(5月 語学所、横浜に設置)	7月 兵部省出張所(大阪兵部省)設置(多聞槽・千貫槽)【兵部省】	1.3 鳥羽・伏見の戦い 1.22 大阪鎮台設置(1.27大阪裁判所に改称) 3.23~閏4.7 天皇大阪へ行幸 5.2 大阪裁判所を大阪府に改称 7月 江戸を東京に改める 8月 造幣寮の工事始まる 9.8 「明治」と改元、同月、天皇東京へ行幸
12月 33人入学 (兵学寮建物の竣工は1月以降)	(8月 京都河東操練所設置)	4月 教導隊設置(本丸内) 5月 兵学寮幼年学舎として大阪に移る(二の丸大手口付近)	1月 薩長土肥、版籍奉還 3月 天皇、再び東幸、東京遷都 6月 新政府、各藩に版籍奉還を命じる。神祇官・太政官のもとに各省を置く組織に 11月 造幣寮工事現場で失火
10月 兵学寮、東京に移転。幼年学舎、教導隊も続いて移転	4月 造兵司役庁設置(青屋口門内中仕切元番所)【兵部省】 5月 仮木造工場竣工 6月 事務所を仮木造工場へ移転	7月 大阪造兵司に改称 8月 大阪鎮台本部創設	11月 泉布観竣工
	2月 大砲製造所に改称	2月 兵部省廃止、陸軍省・海軍省となる	2月 造幣寮竣工 4月 開業 7月 廃藩置県、同時に集権体制の整備、文部省の設置される
M17~20 旧兵学寮建物、歩兵第20連隊兵舎として利用	M6 練馬場(後の大阪砲兵工廠本館)竣工 M8 砲兵支隊に改称 M12 大阪砲兵工廠に改称	M18 紀州御殿を移築し、鎮台本部として利用	8月 近代学校制度(学制)制定 9月 東京横浜間に鉄道開通 10月 富岡製糸場 操業 12.3~M6.1.1 太陽暦採用
			M6.1 徴兵令公布

いずれも後に引き継がれ、大阪の発展に寄与するものになっていった。大坂城址は、明治初年に教育、医療と軍事の諸施設が設置され、この時すでに以後に来るこの地の市民利用と軍事利用の併存と競合の原点をかたちづくっていたと言えるのである。

注

本稿は、橋寺知子、北野克則、川道麟太郎：明治初年に大坂城址に建てられた建物について—近代の大坂城址の利用に関する研究—、平成13年度日本建築学会近畿支部研究報告集、計画系、pp.909～912、平成13年5月、および橋寺知子、川道麟太郎：明治初年の大坂城址の土地利用と建物について—近代の大坂城址の利用に関する研究—、日本建築学会大会学術講演梗概集、F-2、pp.217～218、2001年9月などをもとに、加筆、修正を加え構成したものである。

- 1) 内田九州男：『大坂城研究の歩み』（『大坂城と城下町』、思文閣出版、2000年）によれば、三の丸の範囲については既往研究でもいくつかの説があり、細かな点で差異はあるが、ここで示した範囲と大きくずれることはない。東側の境界・猫間川は三の丸ではなく惣構の境界にあたるが、近代の利用がそこに及ぶところから、ここでは猫間川までを一体に扱うこととする。
- 2) 幕末から明治初期の教育に関しては、倉沢剛：『学制の研究』、講談社、昭和48年をはじめとする研究があり、発足間もない明治政府がとった教育施策が明らかになっている。本論で述べる舎密局や洋学校、医学校の発足過程については、倉沢の同書第2章第7節「大坂における大学の企画」に多くを負っている。
- 3) 同上書、p.88
- 4) 菊池重郎：「舎密局の再発見—姿を消したある建物との対話」、『自然』、1974年8月号、pp.58～70、芝哲夫：『大坂舎密局史』、『大阪大学史紀要』、第1号、1981年、pp.33～47、藤田英夫：『大阪舎密局の史的展開—京都大学の源流』、思文閣出版、平成7年等で、舎密局の歴史的意義等も含めて詳しく述べられている。
- 5) 戦前期より、記念碑の位置と実際の場所が異なることは指摘されていたが、菊池重郎が同上書において、その位置について詳細に検証している。
- 6) 舎密局の平面については、藤田英夫：前掲書（注4）において、「大坂開成所全図」等の図を取り上げてよく整理されている。
- 7) ハラタマについては、芝哲夫：『オランダ人の見た幕末・明治の日本』、菜根出版、1993年に詳しい。同書掲載のハラタマの書簡から、住居の間取りや生活の様子をうかがうことができる。
- 8) 菊池重郎：『大阪城西諸施設に関する田中芳男文書について—特に舎密局の位置ならびに園園計画』、『蘭学資料研究会研究報告』、第282号、1974年5月、pp.1～11、および前掲書（注4）において、明治初年に描かれた構想について、詳しい分析がなされている。
- 9) 神陵史資料研究会編：『史料神陵史—舎密局から三高まで—』、神陵史資料研究会、平成6年、p.68
- 10) 菊池重郎：前掲書（注8）
- 11) 大阪府史編集室編：『大阪府布告集—一』、大阪府、昭和46年、p.196
なお洋学校の設置時期については、倉沢剛は前掲書（注2）において、洋学校督務に就いた何礼之助の建言書の日付が10月であることから「開設は少くとも明治二十年十月以後とせねばならぬ」（p.99）と述べている。
- 12) 倉沢剛：前掲書（注2）、p.91
- 13) 前掲書（注9）、p.98。なお、舎密局から京都へ移転するまでの経緯については、同書及び藤田英夫：前掲書（注4）に詳しい。
- 14) 前掲書（注9）、p.128
- 15) 松田武：『大阪府仮病院の創設』、『大阪大学史紀要』、第1号、1981年5月、及び第2号、1982年5月
- 16) 前掲書（注11）、p.41
- 17) ハラタマの来歴については、芝哲夫の前掲書（注7）に詳しい。
- 18) 石橋栄達：『大阪府仮病院の開設は明治元年末なり』、『臨床医報』、第568号、昭和17年1月10日によると、この日記は他の書類とともに綴られて三高に保存されていたもので、松田武：前掲書（注15）に翻刻されている。『史料神陵史』にも引用されているが、「原本遺失」との注記がある。
- 19) 緒方ヲ次郎は、「更に『浪華仮病院並初代大阪医学校を語る』を補う」、『臨床医報』、昭和17年1月10日で、「明治元年の末より既に鈴木町代官屋敷を病院の仮設地と定めありて同屋敷に普請を加え工事の一部落成を十二月

十四日に見たるに非ずやと推定する」と言う。また松田武は前掲書（注15）で、尼崎町の種痘所が大阪府仮病院となったのではないかと推測している。

20) 松田武：前掲書（注15）、p.66

21) 前掲書（注11）、p.184

22) 大阪府仮病院については、大福寺仮病院や浪華仮病院等の呼び方も見られる。注18の「日記」には、2月25日の欄に「一、上本町八丁目寺町大念寺内教席借受の儀、御許容相成に付」とあるが、これは大福寺の誤りであることが緒方ヲ次郎や松田武によって指摘されている。また、緒方ヲ次郎の手記「浪華仮病院及初代大阪医学校を語る」、『関西医事』、第449号～第455号、昭和14年9月2日～10月14日では、大福寺での仮病院や鈴木町代官屋敷跡へ移転してからの医学校の様子が詳細に描かれている。

23) 大阪府史編集室編：『近現代日記—下』、大阪府史史料第二輯、昭和55年、p.147。『近現代日記』は、筆者未詳ではあるが、幕末から明治中期までの大阪の出来事を書き留めたもので、庶民生活の面から捉えた世相史である。

24) 菊池重郎：『明治初年の大阪における病院建築について—特に城内の大阪軍事病院の建築』、『日本建築学会大会学術講演梗概集』計画系、1983年、pp.2583～2584で言及されている。

25) 前掲書（注9）、p.191

26) 同上書、p.252。医学校廃校後、明治6年2月に大阪府によって新たに大阪府病院が津村別院（北御堂）に設置され、医学教育もなされた。

27) 明治初年に大坂城址に設置された陸軍施設に関しては、小田康徳：『大阪陸軍所の創設とその展開』、『大阪の歴史』第8号、昭和58年3月、pp.1～23に詳しい。

28) 梅溪昇：『大阪兵学寮に関する風文書について』、『ヒストリア』、第56号、昭和45年9月、p.55。また、福良竹亭：『兵部省時代の大坂城』、『上方』、11号、昭和6年11月、p.91では、千貫櫓に兵部省、多聞櫓に会計部があったと、当時兵部省に勤めていた野々村繁蔵の回想が掲載されている。

29) 篠原宏：『陸軍創設史—フランス軍事顧問団の影』、リプロボート、1983年、pp.293～294で、兵学寮の設立日を確定する基本文書はなく、『陸軍省治草史』と当時勤めていた軍人達の自叙伝等での記述では食い違う点があると指摘されている。篠原は、「基本資料を欠いているのは、大村派が実績づくりのため公文書をあまり作らなかったのか、あるいは後で大久保派によって除かれたためか、今後の究明が待たれるところである」と記している。

30) 兵学寮の間取りについては、柳生悦子が『史話—まぼろしの陸軍兵学寮』、六興出版、昭和58年で、当時の日記の記述から推測し示している。しかし、柳生の推定にはかなり問題もある。その点については、兵学寮に関する詳しい報告とともに、別稿で触れる予定である。

31) 福良竹亭：前掲書（注28）では「本丸の中に教導団が出来、それが後になり教導団の退いた後へ師団司令部や会計部が移って事務を取るようになりました」とある。

32) 田部正社：『兵学寮から日露戦争迄』、『偕行社記事』754号、p.198

33) 福良竹亭：前掲書（注28）、p.92

34) 玉置豊次郎：『大阪建設史夜話』、大阪都市協会、昭和55年、p.344

35) 砲兵第四大隊の前身・大阪砲兵隊は明治3年11月に編成された。兵営の竣工年等については『東區史』、第2巻行政篇、昭和15年、p.1023参照。

36) 造兵司については、『大阪砲兵工廠治革史』、大阪砲兵工廠、1902年に明治10年頃以降の配置図等の資料があるが、設置当初の建物については詳しくは述べられていない。なおこの史料は久保在久編：『大阪砲兵工廠資料集』、日本経済評論社、1987年として復刻されている。広川禎秀：『大阪砲兵工廠「本館」の建築年代とその歴史的意義』、『歴史科学』、第86号、pp.1～15、1981年、三宅宏司：『大阪砲兵工廠の研究』、思文閣出版、平成5年、等の研究を参考とした。

37) 緒方富雄：『「短命であった大阪舎密局」補遺—四つの手写資料の追加』、『蘭学資料研究会研究報告』、第278号、1974年1月では、大阪府医学校病院（旧鈴木町代官屋敷）の東隣に置かれたとある。

38) 菊池重郎：前掲書（注24）。また、大阪府仮病院、大阪府医学校病院と大阪軍事病院の関係については、松田武：前掲書（注15）に詳しい。

39) 前掲書（注22）、p.151

40) 柳生悦子：前掲書（注30）などで、この記事は、兵学寮を見ての記述としているが、その時点では大阪軍事病院もでき上がっており、必ずしも兵学寮と特定することはできない。

(2002年9月10日原稿受理、2003年3月20日採用決定)